

'81・4/1 ~ '82・3/31
総合科学部カレンダー

～ 総合科学部の1年間～

編集部

〔4月〕

- 入学式(8日)一憧れの(?)大学生活のスタートです。大学生活に夢ふくらますパンフの入った福袋(?)を手に、有難いお話を聞く。どうでしたか?
- クラブ勧誘—広大MAIN STREET森戸道路でクラブの勧誘。新入生だと判断すると微笑で追ってきますが、気い付けなはれ諸君!
- 前期聴講受付(13日～25日)一情報をしっかり集め、良い席はお早めに!手続きにミスがあると単位はありません、要注意。体育・語学・先輩の勤める講義は死力をつくしてとりましょう。
- 新歓コンパ—我が総科の2・3・4年及び5年生(?)が新入年を歓迎しようと手ぐすねひいて待っています。
- オリエンテーションキャンプ(26日～27日)一体育会主催の行事です。広大ならではの企画だといえるでしょう。フェロー(同学部の先輩)が大学について親切にアドバイス。友人をつくる絶好のチャンスでもあります。例年一度は雨にたたられるこのオリキャン、さてさて今年はどうなりますやら。

〔5月〕

- 西条研修(16日～17日)一西条研修センターにおいて泊りこみの研修、といっても別に堅苦しいものではありません。チューター単位、コース別に先生方との話し合い。統合移転先でもある西条のあまりの田舎さ(失礼)にア然としたりなんかして。
- 春期ソフトボール大会—総科の教官・事務・学生による大会。もう目立とう精神でがんばりましょう。もちろん賞品も出ます。ちなみに昨年の成績は、優勝=情・3、準優勝=地・2でした。

〔6月〕

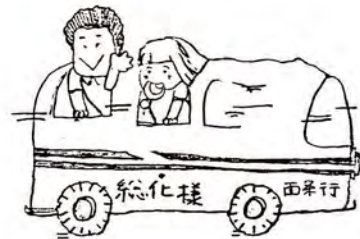
- 六月祭—数週間程前からチケット売りで盛り上げていきます。そして当日、クラブ、学部の有志達が「よってらっしゃい」とばかり森戸道路に店を出す。これはもうあなた「祭り」なのです。

〔7月〕

11日よりお休みです。

〔8月〕

まるまる全部休み。計画はシッカリ立てましょう。車の免許を取るもよし、旅に出るもよし、読書けっこう、スポーツけっこう、前期の復習ますますけっこう



こう。とにかく何かやろうよ。

〔9月〕

- 前期試験—1ヶ月の苦しみとあきらめるしかない(?)
そんなこといわず、ファイトでぶつかれ!

〔10月〕

- 試験休み(1日~14日)—砂漠でオアシスに出会った様、そんな貴重な休みです。故郷へ帰ってゆっくり羽をのばしてはいかがかな。

前期成績発表—精気養い「いざ後期授業へ」と、忘れた頃にやって来る恐怖。“成績表”をいただきに学務へ行く時の手足の震え。初めは誰もこういうもの。歓喜か破滅かはあなたの努力しだいですぞ。

- 後期聴講受付—前期と同じ要領、のはずですが……。

〔11月〕

- 大学祭—やっぱり最大のイベントでしょう。市中パレード、店出し等それはもうにぎやかな3日間です。お祭り総科(?)の面目躍如、3日間狂いましょう。この時だけは世間もゆるしてくれる。1年生もぜひ参加を。

- 秋期ソフトボール大会—春のかたきはぜひとも秋に。総科の伝統となりつつあるこの大会、チーム—丸ねらうは優勝!ちなみに昨年の成績は、優勝=情報・3・4年、準優勝=事務・Aでした。

〔12月〕

- フェニックス駅伝—体育会主催の呉—広大40kmを8人で(女子は海田—広大10kmを4人)走るこの駅伝は学内のみならず広島の名物となっています。学外チームが上位を占めるこの駅伝、1年生の奮闘に期待しています。

- 冬期休暇(21日~翌年1月7日)—短さだけは高校並み。しかし内容の方は?クリスマス、お正月とおめでたいことが続きます。友人どうしてパーティーなどを開いてはいかがかな。でもあまり飲みすぎないように。

〔1月〕

- 共通一次試験—寒い中、コートのえりを立てやってくる受験生を尻目に私たちは優雅な連休を楽しみましょう。

- 卒論提出しめ切り—地獄……だそうです。今のうちからしっかり勉強しときましょうネ。

〔2月〕

- 後期試験—ウヌし、ついにきたか。前期のうらみ今はずし時。でも、しっかり勉強しとかないとかえりうちにあいますゾ。又くれぐれもカンニングなどせぬように。



○卒業祝賀パーティー—総科全体で卒業生をお祝いする日です。あなたも参加して4年生にオメデトウの一言を。先生方もいらっしゃるのでコピを売っておくのも…。又年末頃より計画を立てて準備をするので、その方へもぜひ参加を。

〔3月〕

- 春休み（1日～8日）—一年のしめくくりの有難いお休みです。し残したくないように。
- 二次試験—見るは極楽、受けるは地獄。そういえば〇年前は…となつかしみながら合格電報のバイ

トでも。

- 卒業式—おもえば短い4年間+α。さてさてあなたの4年後は。



『飛翔』 紹介

—その存在意義と今後の展望—

編 集 部

皆様の手に、またこうして『飛翔』No.18をお届けすることができました。

さて、新入生の方々は、『飛翔』とは、一体何なのか御存じないと思いますので、ここに紹介させていただきます。

大学は、教官・職員・学生の三者から成り立っており、この三者が、お互いに、理解し合って、初めて大学の自治が成立します。

ところが、現状として、学生側には、『自治会』なる、学生を代表する機関がありません。そして、三者が一同に会する公的な場は、現在この『飛翔』しかないのです。

『飛翔』創刊の辞には、「この『飛翔』を通じて学生・教官・事務官の間のコミュニケーションが、より一層深まり、そこに相互の信頼に基づいた学部創造発展の道がひらかれることを望んでやまない。総合科学部に永遠の『飛翔』あれ！」（学生側広報委員）とあります。従って、『飛翔』の役割は、三者の相互理解を深めるため、お互いの主義主張を交換し合い（もしくは、交換する場を、設け）総合科学部を、教育の場としても、研究の場としても、あるいは、それらを越えた一つのコミュニティとして、より良いものにすること。また、学部の出来事を、時と共に忘れ去られてしまう、過去の産物とするのではなく、その時の努力、生みの苦しみを、未来に伝えて行く事にあるのです。

ところで、現実の『飛翔』は？というところ、三者が会する段階にはあるのだが、お互いのコミュニケー

ションが深まっている段階には、程遠いと思われる。これは、『飛翔』の発行回数が、年間3～4回と少ないこと、学生編集部の問題に対する視点のレベルが低かったこと、学生側staff（特に、働き盛りの54生）の不足、……など、元学生編集長として反省している点であります。

さて、これからの『飛翔』学生編集委員であります。54生1名、55生9名、に加えてobserverとして、52生2名、53生1名が参加予定です。尚、新編集長は、55生の松浦豊氏です。

活動内容は、週1回の編集会議（約2時間）と、各種座談会開催、アンケート調査、原稿依頼等です。

また4月には、第1回研修合宿（2日程度）を行ない、この中で、これまでの『飛翔』の歩んで来た道を振り返り、『飛翔』編集の基本的精神の検討を行ない、それを支えるテクニカルな面の指導、何らかの文献を用いた討論を行ないたいと思っています。

クラブ持ち、研究会、勉強会持ちの方でもOKです。56生の優秀な（やる気さえあれば良い）staffの参加、また、特に、54・55生の社会文化コースの方の参加、そして、イラスト、写真、詩……の提供、またコンピューターを使ったデータ処理のできる方の協力をお待ちします。もちろん、自由投稿、大歓迎です。

総合科学部が目指す方向 — 新入生諸君へ —

武 森 重 樹



広島大学を改革する最初のステップとして昭和49年に総合科学部が創設され、今年で8回目の新入生諸君を迎えることになりました。この学部創設は旧来の学部体制から脱皮する一つの試金石として各方面から注目され、期待されていますが、現実の道はけわしく、教官、学生共に幾多の困難にぶつかりながら、新しい学部作りに努力してきました。新入生諸君が入学して先ず驚き失望することは、総合科学部を含む5学部がひしめき合う東千田キャンパスの超過密な状態だと思います。キャンパス正門前には見事なフェニックスの木立ちがありますが、総合科学部を見渡せば、アカデミックな風格に欠けた建物、プレハブ教室、手狭な研究室、何一つを見ても失望するものばかりです。学生諸君が大学生活を送るにあたって、建物およびその周辺環境がアカデミックな雰囲気であることは必要だと思います。しかし、欧米諸国の大学キャンパスに比べて日本の国立大学の粗末なことは比較になりません。この点については日本の大学は明らかに後進国と言えるでしょう。この過密状態は東広島市の新キャンパスへ移転することによって解消すると期待されています。この新キャンパスへの統合移転を広島大学の改革への新しい出発点とするためにも、われわれは将来に向かって悔いのない移転計画の実現に着手すべきであります。このように、新キャンパスにおける建物および各種施設の完備など物的条件を充足させることはもちろん重要なことですが、わが学部改革の根本問題は学生諸君が新しい教育理念に如何に意欲的に取組むかということです。またわれわれ教官が研究意欲、研究活動にどれだけ情熱を燃すかということであり、それによってはじめて総合科学部創設の理想が実現される日が来ることでしょう。

総合科学部の特色は学際的、総合的教育・研究の開拓と推進にあると言われています。従来から日本の大学にある学部システムは、ある分野の研究を専

門深化するには多くの長所をもってありますが、今日社会が強く要請している境界領域分野の研究、教育を積極的に推進するためには、旧来のシステムでは学部、学科間の壁が厚く、教育面でも研究面でも多くの欠点をもってあります。そこで総合科学部では、専門教育の課程として、地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学という従来の学部、学科の枠を破る新しい学際的コースを設けました。また、研究組織としては、大講座制を導入し、いろいろな学部出身の教官で構成することによって、学際領域の研究と教育を有効に推進できるようにしております。

さて、新入生諸君はこのような教育組織のもとで大学生活を送ることになりますが、2年生になりますと自分はどのコースに進むかを決める必要があります。昨年度の新入生と座談会をもったとき、総合科学部を受験した動機について話し合いました。その際、大学で勉強するうちに自分でやりたいことが出てくるかも知れない。したがって巾広い視野を持って学び方向づけたいとか、自分の可能性を束縛されず、むしろ可能性をうまく引き出し伸ばせる学部で学びたいとか数多い意欲的な意見が出ました。一方西条の研修センターで行なわれた新入生歓迎会でも多くの新入生と接し、将来の進路についてたずねたところ、意外に多くの学生が既にコースを決めていることに驚きました。今年の新入生諸君も或る程度進路を決めていることでしょうかが大学に入学したこの時点で、もう一度時間をかけて進路について充分な検討をしてみたいかがでしょう。そのためには個々の教官の開講する単一科目を選択してある方向を定めることも必要ですが、総合科学部の特色としている学際的、総合的研究・教育を理解するために総合科目を受講して、各分野の内容を正しく知ること必要かと考えます。総合科目の教育目的は「複雑・多様化する社会の様相の本質を洞察し、日進月歩の科学技術に適応するためには、個々の専門分野の知識だけでなく、諸学を全体的立場から把握する総合的理解にある」と定義されています。例えば、ここ数年間に開講されたテーマとして、「アメリカ

文明の特質” “戦争と平和に関する総合的考察” “ヨーロッパとは何か” “情報と行動” “環境科学へのアプローチ” “生命科学” “人間と環境” “現代自然科学への招待” などがありました。専門的領域にとらわれない広い領域についての概観あるいは特定の問題に対するさまざまな学問領域からの考察がなされています。このような授業内容は或る程度進路を選ぶのに役立つことと思います。

最後に新入生諸君が新しい教育体制で学んで行くに際して一言申しておきます。授業科目の履修方針は従来の学部のカリキュラムに比べてかなり自由度の高いのが特徴であります。学科の壁を越えて広い

視野から専門教育が行なわれていますが、学際的、総合的な研究・教育には、個々の専門分野の基礎科目が是非必要なことを知っていただきたい。好きな分野で十分な研究、勉学をやりうと思えば、不得意な科目でもマスターすることが必要です。単位の修得し易い科目だけを適当に選んで好きな分野がマスターできると考えたら、総合科学部の目指す教育方針は裏目になります。学生諸君はこのことを十分に自覚して、大学生活を意欲的に送られることを期待しています。

(56年度コース・講座委員長
自然環境研究講座・教授)

特集

Take off Soka

—旅人たちの詩—^{うた}

編集部

総合科学部が設立されて今年で7年、今回で第4期生を送り出すまでになりました。

『飛翔』編集部では例年通り卒業生の方々に対し、①卒論の一言紹介、②私の学部観、③講義に対する意見、④大学生活をふり返って、⑤私の学生観・職業観、⑥後輩に薦めたい講義の6つの項目でアンケートをお願いしました。

第4回目となるアンケート結果にも、一世代を経て形成されつつある一総合科学部像—とその変遷の歴史—というものが、うかがい知れるようになったと

思います。

お忙しい中御協力いただいた卒業生の方々には、このアンケート結果を4年間の総決算の一つとして受けとっていただければ幸いです。またこの先輩達の貴重な経験は、我々後輩、特に今年で8回目の新入生にとっては、これから総合科学部の第1歩を踏み出す上でのこの上ない指標となり、また糧となることでしょう。

それではさっそく卒業生のナマの声を聞いてみましょう。

その1

「卒論の一言紹介」

・「マイノリティ問題への一考察 — アンベトカルの思想と行動を通して —」という題にて、より公正な社会へのアプローチを試みてみます。

(社・佐々木)

・「色彩語の研究」——「花が赤い」という時の赤と、「赤の他人」という時の赤は、同じ赤でも明らかに性質がちがう。色彩語にはこのような表現の性質のちがいや色彩表現の精度のちがいによって、おもしろい使い方がある。同じ赤が、どうしてこのような明らかに性質のちがうものを表現するのに使われるのかという単純な疑問を起点として主に日・英・

仏語を中心として色彩語について考えてみた。

(地・椎木)

・第2次大戦後におけるアメリカの対ドイツ政策がどのように変化していったのかを追っていく。

(地・三戸)

・「移民と都市政治」のテーマのもと、シカゴにおけるポーランド系アメリカ人の場合を例にとり、彼らのアメリカ政治との関わりを考察した。

(地・村松)

・『フランス・アンシャンレジーム期におけるコレージュの食生活』食事が性格を支配するという観点